

S5

日本手話における列挙浮標の新タイプ：ジェスチャーからの出現

浅田裕子
(昭和女子大学 [日本])

要旨

本発表では、従来研究では議論されていなかったタイプの List Buoys (列挙浮標と呼ぶ) (Liddell 2003) が日本手話に存在することを報告し、その理論的含意を述べる。

列挙浮標は、諸手話言語で使用されており、それらの列挙浮標は、Liddell がアメリカ手話について記述したものと類似の特性をもつことが知られている (Hendriks 2007; Liddell et al. 2007)。日本手話にも同様な種類の列挙浮標があるが (図 1-2)、この標準的な列挙浮標 (標準型列挙浮標) に加えて、日本手話話者は図3-4 に見られるような列挙浮標も用いる。このタイプでは、非利き手の指が内側に向けられ、一本ずつ折り曲げられており、標準型列挙浮標で指が水平方向に伸ばされていくのと対照的である。本発表では、この新しいタイプの列挙浮標を「内向き型列挙浮標」と呼ぶ。

内向き型列挙浮標は、標準型列挙浮標と以下の点で異なる。

- (i) 内向き型列挙浮標は、典型的には列挙している要素の数を確認する必要がある場面で用いられる。標準型列挙浮標と異なり、内向き型列挙浮標は要素を順序づけてリストアップする場合には使用されない。
- (ii) 内向き型列挙浮標は、説明的談話では用いられない。
- (iii) 内向き型列挙浮標を使用する場合、要素のリストアップ終了後、「3つ、5つ」のように数え上げた要素の個数の数量詞か、あるいは「とか・など」のように列挙が終了したことを標示する表現が必ず現れる。

では、なぜ内向き型列挙浮標の分布は、標準型列挙浮標と比べより限定的なのであろうか？一つの説明として、内向き型列挙浮標は、未だ完全な言語表現ではなく、手話言語と共起するジェスチャーに過ぎないという可能性が挙げられる。音声日本語話者も日本手話話者も個数を数えるジェスチャーとして内向き型列挙浮標に似た指折りジェスチャーを用いるという事実も、この分析の妥当性を示唆している。しかしながら、本発表では、日本語と日本手話の母語話者を対象に行った実験の結果を踏まえ、内向き型列挙浮標がジェスチャーではなく、文法化された要素であることを主張する。実験の結果、日本手話の内向き型列挙浮標と日本語の指折りジェスチャーとの間には重要な差異があることが明らかになった。

- (i) 日本手話では、数えあげられている要素の記述の後、必ず非利き手の指の端を利き手の人差し指で触れる指差し動作が行われる。

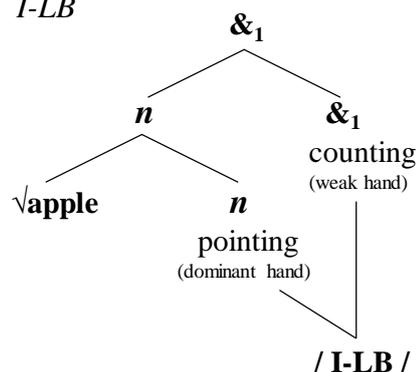
- (ii) 音声日本語と共起するジェスチャーでは、列挙する要素のすべてではなく一部の要素のみに使用した話者もいたが、日本手話ではそのような部分的使用は観察されない。

これらの観察から、発表者は、日本手話の内向き型列挙浮標は、数を数えるジェスチャーから文法化された言語要素であると提案する。より正確には、日本手話の内向き型列挙浮標は (1) の過程を経て出現したものであると主張する。

(1) a. *Counting gesture (CG)*

√apple - CG₁ ... √orange - CG₂ ...

b. *I-LB*



この過程では、利き手による指差し動作が、名詞的要素をそれに対応する数のジェスチャーに結びつけるために重要な役割を果たしている。この指差しが主要部として語彙に導入されることによって語根が名詞化され、(1a) では単なる要素と数との対応に過ぎなかったものが、(1b) が示すような主要部をもつ階層的言語構造になっている。

本提案は、内向き型列挙浮標ではジェスチャー使用と異なり、必ず利き手による指差し動作が行われるという事実を捉えることができる。また、内向き型列挙浮標は、数を数えるジェスチャーからの出現であるため、列挙している要素の数を確認する必要がある場面によく用いられるという事実もうまく捉えられる。

更に興味深いことに、本発表の提案は、Takei & Torigoe 2001; Goldin-Meadow & Butcher 2003 などで報告されている幼児の言語獲得の初期段階で観察される指差しに関する事実とも整合する。

日本手話における二種類の列挙浮標



図 1



図 2



図 3



図 4